



第3章 取材者たちの声

浪江のこころプロジェクトでは、毎号の『浪江のこころ通信』作成にあたり、避難先のNPOや支援組織の方々に取材や原稿執筆のご協力をいただいています。取材者は『通信』第30号（平成25年12月号）の発行時点で、北は秋田県から南は沖縄県まで全国各地の31団体、89名を数えます。取材後も関わりを継続していただいている方もおり、特に福島県外に避難した町民の方々への支援にあたり重要な役割を担っていただいています。

この章では、取材者の皆さんがこれまでどのような想いで『通信』と関わられ、今後の『通信』にどのようなことを期待されているかについて、各取材者へのインタビューや取材者情報交換会の様子などを基にまとめました。

なお、巻末（245〜246ページ）に取材者の皆さんの名前とご所属を掲載しています。

遠藤 智栄さん（宮城県）

地域社会デザイン・ラボ

協働のまちづくりの道半ばで



浪江町では、震災前から自治体と住民が協力しながら地域課題に取り組む「協働のまちづくり」を推進されてきました。私は、その「協働のまちづくり」の話合いの場づくりや仕組みづくりの支援の仕事で震災前は何度も浪江に足を運び、浪江を暮らしやすく元氣にするための話し合いを町民や役場の皆さんと重ねていました。この協働のまちづくりの道半ばで震災が起きてしまい、それまでお世話になっていた方々と連絡が取れなくなり、とても心配していました。ですから、最初にこの取材のお話をいただいた時は、復興への第一歩が始まったと感じました。それまで漠然と心配していたのが、お顔を拝見しながら心配ができるようになったというと語弊があるかもしれませんが、そのような気持ちで取材をはじめました。

取材をはじめてみると、訪問した時には仕事の面接中だった方、仙台で交流会を開きたいとおっしゃっていた方、宮城で新しくお店をはじめられた方、など皆さんのその後がとても気になっています。再取材の機会があればぜひさせていただきたいです。

これからの『浪江のこころ通信』は、「今」に焦点を当てるのが良いと思います。たとえば、これまでに取材を受けていただいた方にお仲間を紹介いただき、何人かで取材を受けていただく。そうすれば、一人ではちょっと、という方や、交流会への参加を遠慮している方でも参加しやすいかもしれません。お友達同士の近況報告の機会を『浪江のこころ通信』で作るのです。そして浪江の絆を大切に、今の生活地で頑張る方々のことをお伝えできたらいいと思います。

畠山 順子さん（秋田県）

特定非営利活動法人あきたパートナーシップ

NPOができる役割を、これからも



『浪江のこころ通信』は、町民の生の声そのまま残る点が良いですね。震災の客観的な記録はたくさんありますが、被災者の声というのでも貴重だと思います。私は震災後、岩手や宮城とはご縁があり炊き出しやがれき処理、支援物資の収集・配布や募金活動などをしたのですが、福島との接点はなく、この取材ではじめてつながりができました。

今は、福島ふるさとふくしま帰還支援事業（県外避難者支援事業）の一つとして、交通弱者の買物や通院など日常生活の足を提供する支援をしています。そこで避難者と接していくうちに、普通なら話したくないと思うようなことも話してくれるようになりました。最初は知人を頼って避難してきたものの、だんだん迷惑をかけたくない、一人になりたい、などと思うようになったり、知人との関係がギクシャクしたり、など、身近な人には話せなくても他人に話せることもあるようです。

秋田への避難者は、最初はあまり活動的ではない人が多かったのですが、平成25年秋に、お母さんたち7人が「秋田避難者おやこの会」を立ち上げました。自分たちで会員募集や寄付を募るチラシを作り、元氣に活動を始めました。春からは畑を借りて農業体験をしたいと張り切っています。私たちもボランティアを募集する支援をしています。

最初のころは泣いたり、感情的になったりしていたのが、最近では自分たちで何かしようという回復力を感じています。

秋田に避難して、それぞれに新しい生活に馴染みはじめ、震災直後とは支援のあり方が変わってきています。NPOには、行政にはできない役割もあるのでこれからも頑張ります。

柴田 裕美さん（山形県）

特定非営利活動法人

山形の公益活動を応援する会・アミル

想いが詰まった言葉を そのまま伝えたい



初めての取材のときから、浪江の方は山形県人に似ているなど思えるほど、ゆったりと打ち解けてお話しいただき、とても有り難かったです。できあがった原稿をご本人に見ていただくのですが、避難所生活ではメールも打てずFAXのない方が多かったのでご自宅を何度か訪問したこともありました。最近では町民の方も仕事などで忙しい日常を過ごされていますから、締め切りまで会えない方は速達で原稿を送り、遅い時間の電話でのやり取りも迷惑がらず一緒に考えていただいています。町民の方の想いの詰まった言葉をそのまま伝えたいと思っています。

2年半のうちに前向きに考える方が多くなったと思います。この状況で「楽しむ」という言葉を使うのは抵抗もあり相応しいかどうかわかりませんが、自分たちにはできることは家族らしく、楽しく、人間らしい生活をしていくことだとお話しされるお母さんもいます。一方で、避難先では近くに浪江町の人もいない、助けてくれる人もいないと思いつ込んでいる方もいらっしゃいます。『浪江のこころ通信』を読んで自分を重ね合わせて同じような方がいたのだと共感できることがあると思います。『浪江のこころ通信』は町民の想いを共有することや情報を提供するという大切な役割を担っているのだと、日ごろから感じています。

これまで取材した皆さんのお話の中に家のある場所や思い出の場所としていろいろな地名が出てきて、私も浪江町に行ってみたくてという気持ちを抱いていました。先日浪江町を訪問する機会がありましたが、町が復興したら皆さんの思い出の場所をまた巡ってみたいですね。

古山 郁さん（福島県）

特定非営利活動法人

市民公益活動パートナーズ

町民のみなさまの アーカイブとして



これまでの取材を通して、最初の頃は希望に満ちたお話が多かったのが、最近は少なくなったと感じています。その背景には、避難生活が長引いていることや、未だ生活再建に向けた心の整理ができていないことなどがあ

るようです。特に復興住宅の話題が出始めた頃から、「帰る、帰らない」より、現実的に「いつ今の暮らしが変わるのか、どこに住むか、どうしていいかわからない」といった大きな不安を抱えている方が増えたように感じます。避難先で地域に馴染み、人とのつながりも生まれ、簡単に転居を決められない。新たな生活をするために、また新しい人間関係を築かなければならないが、自分の心と体が持つのか。などなど様々な不安要素があるようです。

これから自宅を再建したり、復興住宅に移ったり、誰がどこに行ったかわからなくなりかねません。そのような言わば第二の復興生活が落ち着くまでは「今ここにいます、こうして暮らしています」という情報を伝える『浪江のこころ通信』は町民のアーカイブとして必要だと思っています。

また、新たに誌面を通じて町民の「よりどころ」の情報、たとえば復興住宅集会所などの基本情報や交流の様子、リーダーのお話を掲載するのも良いと思います。

私どもの団体では、避難先である桑折町と避難元である浪江町をはじめとした県北地域で、地域交流と賑わいづくりの支援事業を行っています。取材を通じて浪江の方にその活動を知っていただけたら、取材相手にその後の活動でキーパーソンになっていただけたら、様々な相乗効果があることを実感しています。

鍋嶋 洋子さん (千葉県)

特定非営利活動法人

ちば市民活動・市民事業サポートクラブ

心は浪江に、 どこに暮らしても



これまでに20件近くの取材をしてきましたが、すべての取材相手のお顔が浮かびます。震災の年の夏の取材では、浪江の方はドアを半開きにかけていることがほとんどで、取材先がどのお宅なのかすぐにわかりました。浪江は風通しの良いところだったので避難先でも、風の抜けない暮らしは耐えられないとお聞きしました。今は変わったことでしょうか。最近の取材では、土が恋しいとか、昔のような近所づきあいがなくて寂しいとかいうお話をよくお聞きします。

『浪江のこころ通信』は、大変意義のあるものだと思います。町民の今を伝えることもできるし、取材に応じていただく方も話しながら心を整理しているようです。

震災直後は、大変な思いをしたことを人に話したい、元気だということ伝えたい、という方ばかりで、震災への思いをストレートにお話いただき、そのまま記事にしていきました。後から写真を載せてくれてありがとうございますとお礼をいただいたこともあります。

最近、皆さんの暮らしが落ち着いてきて、お話の内容も変わってきています。これからの『浪江のこころ通信』の内容は、その変化に応じて変えていく必要があるでしょう。たとえば、浪江で大切にしてきた文化、祭りのことや、今は別のところで暮らしていても心は浪江にあるという町民の思いを伝えるのでしょうか。

私どもの団体では、この取材活動を契機に、避難住民同士の交流の推進等を行う「復興支援員」のサポートや福島県の復興支援事業を展開できるようにになりました。取材から取り組みが広がっていることを大変うれしく思っています。

秋山 三枝子さん (新潟県)

特定非営利活動法人

くびき野NPOサポートセンター

“こころ”の中にも いろんな色合いがあるように



東日本大震災の支援としては、上越市に避難されてきた方の受け入れを市と社会福祉協議会が一緒にやっていて、運営のお手伝いを3月頃やっていました。現地に直接支援ができないなど、歯痒さを感じていたところに取材協力のお話をいただき、新潟にいてできることなら喜んでお引き受けしました。

活動柄、団体の取材は慣れていても、避難されてきた方に向き合い、どんな言葉をかけてお話を聞いたらいいか、はじめは不安がありました。最初に取材をした方がいろんなことを感じておられて、聞くとたくさん話してください、おおよその様子を掴むことができました。取材を通じて被災された方の話を聞くことができる、これはすぐありがたい経験を見せていただいていると、回数を増すことに感じています。なぜなら、その後、ニュース報道を見る目がまるつきり変わりました。こうした経験は若い人にもしてほしいと思い、取材は分担しています。

ちなみに、私が請戸の方を取材してからは、地名がとても印象的だったので、テレビの特集で“請戸の踊り”が放送されると、もう他人事ではなく一緒に気持ち弾んでくるようでした。浪江に関わる人が増えること支援者も増えるのかなと思います。ちょうど家族とふるさと納税の話をしていたのですが、自分が支援するところやつながりのあるところに使われていくといいなと思いますね。

『浪江のこころ通信』は、“こころ”の中にもいろんな色合いがあるように、直接取材だけではなく投稿や避難されてきた方々をその地域で支えている人の紹介もあっていいかなと思います。

谷内 博史さん（石川県）

ピースバンクいしかわ

官民協働の取り組みだったことを初めて知った



私の福島での復興活動への関わりは、震災以前から交流のあった、いわき市のまちづくりNPOの方々に協力する形で、地元七尾市で開催された食イベントの中で、福島のお酒を飲みながら食を楽しむプログラムを開催したのが最初でした。能登半島地震の際にも、能登のお酒を飲んでいただいて各地で応援いただいた経験があったので、個人のボランティアとしては、1度だけですが、震災から4カ月後に、いわき市のボランティアセンターを通じて、市内の倒れたブロック塀の片づけ作業を手伝わせていただきました。

本職は七尾市の職員なのですが、七尾市はもともと南相馬市との交流があったので、下水道技師や情報システム管理ができる職員を応援派遣したりしていただきました。『浪江のころ通信』の取り組みも、てっきり浪江町役場から各地の自治体の広報担当職員などに応援要請をして始まっていて、全国各地の自治体も協力して取り組んでいるのではないかと感じていました。しかし後になって、他では例のない、各地のNPOと協力して行われている官民協働事業だと聞いて「そうだったのか」と今更ながら驚いています。

七尾市には被災地から、多い時で41世帯95人、現在は18世帯（平成26年1月現在）が避難されていますが、浪江町から避難された方に限らず、地域での交流の取り組みなどに積極的に出てこられる方、そうでない方がはつきり分かれている感じがします。そういう方々にどんな情報を届けるべきなのか、避難者の受け入れをしている自治体職員も、日々の業務の関わりの中でいろいろなノウハウを持っていますから、各地の自治体もネットワークで協働できれば良いのではないかと思います。

取材依頼を受けた時からこの取り組み自体、記録アーカイブとしてとても意味のあることと感じています。誌面作りは、あくまで県外避難者に寄り添って応援するものであってほしいです。だからこそ取材する側にも傾聴する力や責任が求められるのだと思います。

田口 美紀さん（京都府）

特定非営利活動法人きょうとNPOセンター

思い続ける気持ちが芽を出した



これまで6件の取材をしてきましたが、すべての取材相手が印象的です。涙を流しながらお話しいただいた方。怒りをどこにぶつけたら良いか、ジレンマをずっと抱えてこられた方。取材中、お話をされていくうちに、すぐに解決できない現状への戸惑いや感情が大きくなっていかれた方。取材後も交流が続いている方もいます。

皆さん取材に快くご協力いただき、何時間もお話ししていただきましたが、それを限られた紙面にどのようにまとめるかが大変難しいと感じていました。ある原稿が掲載された時、取材相手から「表現したかったことを言葉にしてくれてありがとう」とお礼を言われて肩の荷が下りた気がしました。

取材相手が話す内容、感じられている内容は変わってきています。これからは、その変遷をとらえて、メッセージ性を高める工夫があると良いと思います。たとえば、今のような広報誌に掲載するスタイルのほかに、テーマによってまとめた形で冊子化してはどうでしょうか。『浪江のころ通信』の第一の読み手はもちろん町民の皆さんですが、第二、第三の読み手には、その方が伝わるような気がします。

震災の年の4月に宮城で復興支援のプロジェクトに参加したことがあります。そのときのイメージから、被災された方たちに対して、勝手な思い込みを抱いていた部分もあったのですが、取材をして直接お話を伺いすることで、大切にしたいモノの見方や考え方など、自分の根幹の部分が形成された気がします。継続して支援する気持ちを持ち続けること。思い続ける気持ちは育つということ。そういう大切なものを取材者の皆さんからいただいたように感じています。

竹内 瞳さん（広島県）

ひろしま市民活動ネットワーク
HEART to HEART

取材でできた つながりを大切に



取材に関わる前は、被災地へ行った学生やNGO等による報告会等はしていましたが、被災者に直接お会いしたのは取材が初めてでした。取材を試みて生の声を聴くことはとても大切だと感じましたし、それぞれいろいろな事情もありで、衝撃を受けました。

取材相手とは、取材後もハガキやクリスマスカードのやり取りをするようになり、今も関係が続いています。私たちのNPOの報告会でお話をいただいたり、NPO仲間で畑のお手伝いに行ったりもしました。私にとっては支援というよりお友達が増えたという感じで、寄り添いながら、新しい住民の方をこちらのコミュニティにどのように受け入れていくかをいつも考えています。

最初の取材時には不安や不幸を嘆いていた取材相手も、最近はそのようなことをおっしゃらなくなりました。愚痴を言っても仕方がない、生活していかないと、というお気持ちのようです。今は、あのときはどうだった、ということより、今どうしているか、頑張っているということに共感したい人が多い気がします。

これからの『浪江のこころ通信』の取材は、今のようには役場から取材を受けていただく方へ連絡する方法の他に、話したい人に手を挙げてもらう方法もあると思います。今回の震災のことを今すぐにすべて話してもらおうというのは無理があるし、話したいと思うまでに時間がかかるかもしれません。被災者の声を集めているということを発信し続けていけば、いずれ話したい人も出てくるのではないのでしょうか。

佐々倉 玲於さん（高知県）

一般社団法人いなかパイプ

浪江町の魅力を発信し続ける 『通信』として



私は、四国での取材を担当させていただきました。取材を通して、町民の方々がとても前向きであったことが印象に残ります。愛媛に暮らす方はミカン農家を始め、収穫したミカンを福島に送っているというのです。自分だけが恩恵を得るのではなく、その収穫の喜びを福島にも届けたいと。悲しいことや苦しいこともたくさんあるはずなのに、むしろ取材した私の方が勇気をいただきました。また、浪江町での暮らしを懐かしく、誇らしく語る姿からは、浪江を訪問したくない私にも故郷の魅力が大いに伝わってきました。このことは、まちの魅力をよく知っている浪江を大好きな人が、各地にすることを意味していると思います。

私は、大学卒業後、沖縄・那覇でまちづくりのNPOを設立し、5年間の活動後、故郷である高知に戻り、現在は四万十町で地域の資源を活かした活動を進めています。地域の宝を発掘・活用・発信し、地域経済を活性化させていく一連の取り組みから、私はたくさんの方の経験や知恵を得てきました。都会から招いての田舎暮らし体験事業などでは、一番は移住を目的とはしていますが、それよりも1か月間この地域に関係を持った人々が全国に散らばっていくことに意味があると思っています。全国にこの地域のファンが増えることで、行き交う人々やいずれは移住する人だつて増えてくる。これから先、浪江町で頑張る人と県外にいる人とのつなぎ役として、そして故郷の楽しさや魅力を発信し続ける役割として、『浪江のこころ通信』には今後の展開が大いに期待されると思います。微力ですが、私も応援していきます。

下地 美香さん（沖縄県）

特定非営利活動法人まちなか研究所わくわく

新しい視点で これからも取材を



NPO法人まちなか研究所わくわくは、沖縄県内のNPOや市民活動団体の活動支援を行っています。被災者支援を行っている団体との関わりはありましたが、沖縄に避難されている方に直接接する機会はほとんどありませんでした。

平成23年7月にこの取材のお話をいただきました。取材では、地元から離れ沖縄で生活をされている避難者の方々の迷いや葛藤、決断、たくさんの方のやさしさに触れた出来事など生の声をお聴きしました。その声を全国にいる浪江町民のみなさんにお届けする重要な役割であると感じています。

平成25年11月に行われた取材協力者情報交換会で、『浪江のこころ通信』の取材を断る方が増えてきていると聞きました。記事では、名前や写真が掲載されるため、ためらう方もいるかもしれませんが、また、そつとしておいて欲しい、あまり人と話したくないなど、避難されて時間も経過し生活環境も変わっていく中で様々な理由があると思います。アンケート形式にしたり匿名での記事にするなど名前を出さない方法もあるかもしれません。これまでとは違うアプローチで声を聴いていくことが必要なのではないでしょうか。

浪江町民のみなさんがおかれる状況は変化していきますが、人と人とのつながりが強い浪江の方々が全国にばらばらになってしまっている現在、『浪江のこころ通信』の果たす役割は益々重要になってくると思います。これからも沖縄からできることを一緒に取り組んでいきます。

長沼 琴さん・舛田さやかさん（福島県）

浪江町役場 広報誌担当

（平成21年度から平成24年3月まで長沼さん）
（平成25年4月から舛田さんが広報誌を担当）

誰よりも先に原稿を読めるのが 担当者の役得です



浪江町の広報誌担当として、どのような紙面にすれば町民の皆様にはわかりやすいかをいつも考えています。広報誌担当は1人なので、通常の広報誌に『浪江のこころ通信』を加えるとそれなりの業務量になります。取材原稿を読んで町民の方の思いに共感したり、町民の方から記事を楽しみにしている、などの感想をいただいたりして、やりがいを感じています。いろいろな方の貴重なお声が詰まった原稿を誰よりも先に読めるという担当者の役得もあります。

自分でも直接町民の方のお話をお伺いしたいので、取材相手が県内のみではできるだけ取材に行くようにしてきました。新しいことに取り組まれている方をどんどん取り上げたいと思い、アンテナを張り巡らせて取材相手を見つけています。

今は震災直後とは町民の思いが変わってきていると感じています。『浪江のこころ通信』も、昔の町のイベントの思い出などと何かテーマを設けるとか、今ががんばっていることを取り上げるなど、視点を変えていく必要があると思っています。

取材にあたっては、全国のNPO等のネットワークにより多くの方々にご協力いただき大変ありがたいと感じています。震災がなければこのような縁もなかっただろうと思います。このような取り組みを最初に出来たのが浪江町で本当によかったと思いますし、ご提案、ご協力をいただいた櫻井先生にも感謝しています。

「浪江のこころプロジェクト」取材者情報交換会

平成25年10月12日(土)～13日(日)の2日間に行われ、北は秋田県から南は沖縄県まで全国各地の取材者が集い、情報交換会「『浪江のこころ通信』これまでとこれから」が開催されました。

当日は、プロジェクトのこれまでの取り組みについて振り返り、各地の状況についての情報交換や浪江町内への視察等を行いながら、今後のプロジェクトのあり方について議論を深めました。

1日目・情報交換会

浪江町の復興状況についての町からの報告と、浪江のこころプロジェクトのプロジェクトリーダーである高崎経済大学櫻井常矢教授から、これまでの経緯についての講話が行われたのに続いて、取材者のグループワークを行い、各地の状況に関する情報交換や、今後の『浪江のこころ通信』のあり方についての意見交換を行いました。

2日目・町内視察

バスで浪江町内を視察し、町の現状について理解を深めました。

○グループワークで出された取材者の声 (抜粋)

- お話いただく内容の変化
 - 震災直後と今では話したいことが違ってきている。
 - 『浪江のこころ通信』が始まったころは、被災当時の状況、避難の経緯の話が多かった。
 - 最近では、「あの人はどうしているかな」「〇〇に会いたい」「浪江で〇〇をしたい」といった内容は減ってきた。
 - 現在の暮らしや今後の生活の具体的な話が増えてきている。町に戻って働きたいという高校生もいた。
 - 町に戻るか戻らないか悩んでいる人が多い。決断の材料が欲しい、どう生きていくか決めないといけないといったお話も増えている。
- 取材相手にとつての『浪江のこころ通信』の意味
- 取材という機会が普段話せないことを話せる場になっている。取材が終わった時に、「いっぱい話せて良かった」とおっしゃっていただいたこともあった。
 - 取材を待っている人もいる。
 - 町へ戻るかどうかといったことについては

家族の間で意見が異なることもあった。顔と名前が出ると本音が言いにくいのではないか。掲載された発言が周囲の人にどう思われるか不安もある。

取材に行っても「そっとしておいて欲しい」という声もある。

取材者の想い

- 避難者の声を聞き、寄り添っていく機会のひとつとなっている。
- 本心に話されたいことを、きちんと聞き出せたか気になっている。
- 取材を受けた方は、一歩踏み出せている人。取材を断られた方はどのような想いなのか気になる。
- 『浪江のこころ通信』を読む町民の方の想いを知りたい。

今後のプロジェクト・『浪江のこころ通信』のあり方について

- 取材者が取材を通じて感じた課題を、町に伝えていく仕組みがあるとよい。
- 町民自身が取材をする方法もあるのではないか。ネットワークづくりにもつながる。
- 1人のお話をじっくり伺うのも大切だが、同時に短い文章で近況を載せるコーナーや、グループインタビュー(町民による座談会)といった形式もあるのではないか。
- 避難先の良いところや、昔の町の行事の思い出といったようにテーマを決めて取材する方法もある。

○ 10月12日 取材者情報交換会の様子（郡山市市民交流プラザ）



○ 10月13日 町内視察の様子

